

宮の沢町内会 医療と介護の町づくり通信

第12号 2025年12月10日発行
発行者 宮の沢町内会医療と介護の連絡協議会

先日、ホサナファミリークリニックの一木院長のご好意で昨年に引き続き宮の沢会館で「ケアニン」という認知症患者に寄り添う新人の介護職の青年が、最後の看取りまで寄り添った物語を鑑賞させていただきました。

本会も共催という形で協力させていただきました。

現在の介護施設は最後の看取りまで行っていただけの施設はまだ多くはありませんが、ホサナグループにはホサナケアホームが看取りまで行える数少ない施設として昨年誕生しました。「命」が尽きる瞬間まで寄り添う本来の介護の姿を映画「ケアニン」を観て深く考えさせられ、一木院長の医療と介護に全力で取り組む姿勢を深く感じ取りました。



(7.10.19 宮小にて防災運動会)

私が宮の沢町内会で最も力を入れてきたことは、安心して暮らせる町づくりです。お陰様で昨年札幌孝仁会記念病院が仲間に加わっていただいたことで町内で発生した受入れ病院がなかなか決まらなかった救急患者さんをすぐに受入れていただきました。また、認知症の進行で入退院を繰り返していた方を第二包括支援センターに連絡して先日介護認定を受けることにつながり「要介護4」となり、介護支援が支障なく受けることができたことと連絡があるなど、やっと成果が出始めてきたように思います。

今回はホサナファミリークリニック一木院長が産経アドス産経新聞生活情報センターさんが発行した「2025年度版 明日の高齢医療を拓く信頼のドクター」に熱い思いが掲載され、本会会報誌にの転載のお許しをいただきましたので掲載させていただきました。宮の沢に心強い医療と介護のスペシャリストがいる安心感に浸っていただけると幸いです。

(中川 文責)

在宅医療や小規模多機能型居宅介護などで
地域の医療と介護に貢献する

愛をもってささえ、愛をもって患者に寄り添う医師



隣人愛と謙遜をもって患者様に接し、
ホサナがあってよかったと
思っていただけよう励んでいます

医療法人社団棕櫚の会
ホサナファミリークリニック

理事長・院長 一木 崇宏

信頼の主治医

明日の高齢者医療を拓く
信頼のドクター

2025^{年版}

介護保険が始まる以前から毎月各区で在宅ケア連絡会議を行うなど、在宅医療・介護への熱量が高い北海道札幌市。全区にある在宅ケア連絡会議は地域の医療機関、介護関係者や薬剤師、訪問看護師やケアマネジャー等、医療介護関係者が定期的に集まり、勉強会や懇親会など交流の場を設けており、医療と介護の繋がりが強い地域である。在宅医療の医療機関、患者数共に増加傾向にあるが、「潜在的な需要は更に高いと思います」と、医療法人社団棕櫚の会 ホサナファミリークリニックの一木崇宏理事長は言う。

同氏は在宅医療を始め、小規模多機能介護施設や老人ホームといった地域医療や福祉に纏わる様々な施設を運営。地域に深く貢献する医師である。

「意に反しておうち以外で最期を迎える患者様もまだ多くいらっしゃいます。一人暮らしでも、おうちでの看取りは不可能ではありません。在宅医療の可能性を周知し、患者様を地域から引き離さず、人生の最期までお付き合いしたいのです」

そんな一木理事長はクリスチャン。法人名に冠した「棕櫚」も聖書の一説が元である。法人理念は「ギリシヤの「愛」の精神に基づいた隣人愛と謙遜をもって神と人々に仕え、良質な医療・ケアを提供します」とした。

「この精神で患者様に接し、最良のことをして差し上げる。そうして、ホサナがあつてよかったと思つていただけるよう励んでいます」

心優しいスタッフたちと日々命に向き合う一木理事長。その深い隣人愛と、地域医療への想いに迫る。

祖父母と北海道への憧れが総合診療医への道に繋がる 神様の導きでクリニックの開業を決意

祖父母が北海道の僻地で歯科医院を営んでおり、地域住民と距離が近い様子に憧れの念を抱いていた一木



同院のある札幌市では在宅ケア連絡会議を実施

理事長。

医師と北海道、双方への憧れから札幌医科大学に進学。専攻は、子どもが好きで、身体全体を幅広く診る科であることから小児科に決める。大学卒業後は北海道立小児総合保健センター、青森県立中央病院、国立療養所八雲病院で研修を行った。

「がんなどで亡くなる子どもたちを見て、悔しい思いをすることも。しかし、元気に回復することが殆どで、助けることがドクターの仕事だと感じていました」

青森県立中央病院では小児科に加え、夜間救急の当番も行った一木理事長。小児科は問題がなかったが大人の患者への対応が難しく不安もあったという。

「この時、自治医科大学卒業で、地域医療をされている先生方と出会い、総合診療医が気になり始めました。また、祖父母への憧れもあり、僻地への興味も強くなっていったのです」

こうして1998年、当時人口4300名程だった穂別町にある町立穂別病院で、僻地医療に携わることになる。2002年からは、地域包括ケアに先駆けて取り組んだ鎌田実医師に師事するため諏訪中央病院に勤務。急性期病院でありながら在宅医療や地域での健康教室にも取り組み、総合診療部だけではなく、消化器内科、循環器内科や呼吸器内科など内科の医師が纏まってカンファレンスを行う、総合診療医を育む環境で多くの学びを得た。また諏訪では在宅医療に従事し、在宅での看取りを多く経験。改めて在宅医療の素晴らしさを実感した。

翌年には再び穂別病院へ。同時期に、病院から有床診療所に建て替える話が出ており、一木理事長は新しくできるむかわ町国民健康保険穂別診療所の院長を務めることに。こうして2005年から、診療所で8年

に亘って地域医療に貢献した。病床を減らす分、在宅医療に力を入れ、穂別でも在宅や老人ホームでの看取りに積極的に取り組んだ。

2013年には札幌に戻り、クラーク病院に勤務した一木理事長。この頃はまだ開業を考えていなかったという。ただ、大都市札幌であつても在宅医療がまだまだ普及していないという現実を見て、何とかしなければならぬという思いは強く感じていた。転機となったのは、「宣教師の方が折ってくれたこと」だ。

「神様は貴方の思うことをやりなさいと言っていますよ」と言っていたことで開業に思い至り、神様のお導きだと考えました」

こうして2014年、教会の2階にある12畳の小さなスペースで同じ教会員のクリスチャンの医師とホサナファミリークリニックを開業。キリスト教の「隣人愛」の精神から、「愛をもってささえ、愛をもって寄り添う」という価値観を重視し運営を行っている。

認知症や末期がんの患者とその家族を支える医療 在宅医療で重要なのは「どう看取るか」

2016年には医療法人化、2017年には移転が必要になった程の強い需要を受け、地域医療を支える同院。開業に当たり、一木理事長には「認知症が酷くなり社会から孤立した方や、自宅で最期を迎えたい末期がんの患者様とご家族を支え、寄り添っていききたい」という想いがあつた。この想いをさらに強くし、介護施設や高齢者住宅の開設をしたいという願いを抱いたのは、開業当初にある患者の対応をしたことがきっかけである。

患者は末期のがんで、始めは2人の子どもが交代で独り暮らしの患者宅へ通い介護を行っていた。しかしいよいよ2人とも仕事を休めなくなり、子どもはまだ自宅での生活が可能であるにも関わらず入院を打診し



ニーズに合わせた施設を活用し自宅で最期を迎えられるよう支援

た。

「緩和ケア病棟はご自宅から遠く、地域から引きはがされてしまう。患者様は泣いていましたし、私も反対しました。この時、やはり24時間体制の介護や近くにホスピス、もしくは看取りにも対応可能な高齢者住宅が必要だと感じたのです」

また認知症については、軽度のうちに相談することが重要になる。たとえば、布団に排泄し、家族が呼んだ救急車にも乗らず緊急搬送が出来ない認知症患者がいた。連絡を受け一木理事長が自宅へ向かい、環境を整えて床ずれを治療。しばらくの間訪問診療を続け丁寧に話を聞くと、患者は入院を受け入れてくれたという。

「もつと早いうちから関係を築いていれば、ご本人もご家族も苦みせず済んだはず。認知症になって通院をしなくなってしまう、ご家族の方が薬を取りに行くことも多いのですが、長期になれば、医療機関も薬を出せなくなります。このような時、ご家族は勿論、医療機関の方も、早めに在宅医療へと繋げて欲しいと思います」

加えて一木理事長は、「在宅医療では、どう看取るかが大事」だと言う。印象深い例では、101歳の女性患者の例を挙げた。

ある年の2月頃。患者は酸素飽和度が低く入院を検討する状態だった。しかし娘は「101歳まで家で頑張ってきた。何とか家で診られませんか」と言う。一木理事長は自宅での治療を決め、酸素吸入や点滴などの治療を行った。結果、酸素吸入が必要ではあるが患者は元氣を取り戻した。

すると4月頃、元氣になった患者が、「死ぬ前に墓参りに行きたい」と言う。「お墓がある二セコまで車で2時間もかかる。けれど何とか希望を叶えてあげたい。そんな折、スタッフが「行

きましよう！」と声を上げてくれました。そうしておばあちゃんと一緒に、ドライブをすることになったのです」

娘が運転する車に患者と看護師が乗り、一木理事長は志願した事務員2名と別の車で同行した。「無事にお墓参りを終えた後、おばあちゃんはお盆に来る」と。皆最後のお墓参りだと思っていたのに、次のことも考えていたのです」

生きる気力の強さか、患者はお盆も、そして翌年も墓参りに向かった。103歳で天寿を全うし、自宅で旅立ったという。

「『看取る』という死亡診断をするというイメージがあるかもしれませんが、人生の最終段階の時期を支え、寄り添い、その方の生きることを手伝いをする、その過程が『看取る』ということだと考えています。ご家族から『良い看取りだった、おかげで最期まで見送れた』と言っていただけると、『在宅医として仕事ができた』と感じます。小児科時代は助けることが絶対で、患者の死は敗北くらいに思っていました。今は患者さんの人生の最期をどのように見送るのかということも重要だと思っています。人生で1回きりで、そして100%の人に訪れる『死』についてしっかり向き合う必要性を感じています。患者様もご家族も納得した最期を迎えられるよう、これからも尽力して行きたいですね」

地域医療と介護を支える多くの施設を運営 在宅医療の切り札となる小規模多機能型居宅介護

ホサナファミリークリニックを中心に、小規模多機能型居宅介護「まるごとケアの家ホサナホーム」、ホサナ訪問看護ステーション、ハレルヤ訪問介護ステーション、住宅型有料老人ホーム「ホサナケアホーム」を運営する同院。スタッフはグループ全体で約50名。医師は一木理事長を筆頭に在宅専門医の資格を持つ医

師をはじめとして、様々な臨床経験を積んでいる百戦錬磨の志高い人員が集う。

訪問診療では自宅や老人ホームへと赴き、訪問看護ではそのサポートを行っている。更にそれを支えるのが小規模多機能型居宅介護である。

「医療が24時間行えても、介護を24時間行えなければおうちにはいられません。在宅医療をしていて、生活を支える介護がいかに重要か身に沁みました。そのため小規模多機能で在宅診療を支えたいという想いで開設いたしました」

小規模多機能型居宅介護は、介護保険制度で創設された地域密着型サービス。「通い」、「訪問」、「泊まり」を一貫して行える複合型の施設である。元来はこれらを個別に行う施設がなく、特に認知症の被介護者へのリロケーションダメージに不安があった。

小規模多機能型居宅介護では、同じ介護者が一貫して被介護者を見ることができ、24時間緊急対応も可能。訪問介護のように滞在時間による介護報酬の増減もない。

「通所を拒む認知症の方のおうちに毎日訪問し、挨拶と世間話だけをすることもできます。訪問を続けるうちに個人として認識してもらえ、信頼関係ができ、通所してもらえるようになる場合も。柔軟なサービスが小規模多機能の強みです」

また、負担が多い家族への助けにもなる。「週2回泊まりを入れ自由な時間ができると、ご家族の負担は随分減ります。介護者さんへのケアは重要なので、積極的に支援や相談、お声掛けなどをしていきますね」

加えて、介護者が冠婚葬祭や体調不良など介護ができない際に、被介護者を預けることも可能だ。緊急でショートステイ先を探すのは難しいが、小規模多機能型居宅介護の宿泊は登録者以外も利用できる。こういった様々なメリットから、一木理事長は小規模多機能型居宅介護について「在宅医療の切り札となる制度」だと太鼓判を押した。

「老人ホームを含め、終の棲家の問題には、重みも感じています。できる限り患者様がおうちで最期を迎えられるよう手を尽くしていきたいです」



上映会や夏祭りを通じて地域との連携を強化する

展望は認知症患者に適した小規模施設の開設 地域との関わりを更に強化し高齢者が孤立しない環境を作る

今後の展望は各施設で人員を充実させ、サービスの強化を図ることだと一木理事長。そして「認知症のグループホーム、及びホームホスピスの開設」を挙げた。「認知症の方は大規模な施設より小規模でのケアが向いています。比較的小人数の入居者で、ケアから看取りまで行う施設を開設し、認知症の方にとって良い環境を作りたいのです」

また、「地域との連携強化」も目標だ。現在も長期休みに駄菓子屋を開き、保育園のお祭りや町内の夏祭りに協力。他に、気軽に健康について相談できる「暮らしの保健室」や、町内会館で小規模多機能型居宅介護を舞台にした認知症がテーマの映画「ケアニン」の上映会。コンサート、手品のショーなど数々の活動で、地域とグループの関わりを深めている。

こうした活動を経て「介護で困ったら気軽に専門家へ相談でき、相談がなくともお茶を飲んでお話できる、たまり場のような場所を作りたい」と、一木理事長は夢を語る。「地域と繋がりが、高齢者が孤立しない環境を作りたい。そんな場所を作ること、皆にホッとしたと思っていただけると嬉しいです」

患者や利用者、その家族が独りで悩まなくても済むように、日々尽力する一木理事長。同氏の愛と祝福を紡ぐ言葉が、悩める人々にとっての福音に、そして救いの手となっている。

患者と患者家族の不安に寄り添う小児在宅医療 子どもと大人の狭間で惑う移行期医療を積極的に受け入れる

小児や移行期の在宅医療も行う同院。小児で印象的な患者は「当時5歳で、臨床的脳死状態の患者」だと語る。その患者は人工呼吸器が必要で、入院先から「いつ亡くなってもおかしくない」と言われていた。患者の両親は看取る覚悟で在宅医療への移行を決意。同院の訪問診療を受けることが決まる。

同院へ移って1年。患者は小学校の入学式へ出ることに。しかし退院後初めての外出で母としては不安があった。そこで一木理事長は入学式への同行を申し出る。人工呼吸器を付けての入学式で医師が傍にいることが、どれほど心強かったかは想像に難くない。

「この春、その子の高校の入学式がありました。お母さんは初め、少しの外出も怖がっていましたが、現在は積極的にお出かけしてくれています。先日はクライマックスシリーズでエスコンフィールドにも行ってきたそうです。一緒に歩んできた道程が印象深いケースです」

また、同院では移行期医療の患者を多く診療している。20〜30歳ほどの移行期の患者は、てんかんなどの持病があれば、主治医に診てもらうことができる。しかし持病がなければ、小児科では年齢で、内科では脳性麻痺を原因に診療を断られることも多い。

「在宅医療では日常の管理に加え、発熱などは臨時往診をし、体調が悪ければ入院先を探し、てんかん等の持病の投薬も専門医と連携を取りながら在宅で対応できます。安心していただくために、狭間で苦しんでいる方を積極的に受け入れているのです」

こうした一木理事長の取り組みが、幼少の頃より難病を抱える患者、そしてずっと患者を支え続けてきた家族の心を救っている。

訪問看護、訪問介護職員募集中

私たち医療法人社団棕櫚（しゅろ）の会は西区宮の沢で訪問診療、訪問看護を地域に提供しつつ、小規模多機能や住宅型有料老人ホームも開設し、人生の最終段階まで地域で支えることができるように取り組んでおります。

大切にしているのは「その人らしい暮らし」を最期まで支える医療・ケアです。訪問看護では、病気だけでなく人生や思いに寄り添い、医師と連携し在宅や老人ホームでの生活をお手伝いします。未経験の方も同行研修があり安心して始められます。

また、住宅型有料老人ホームでは、介護士が生活支援と尊厳を守る介護を担います。流れ作業ではなく、その人らしさを尊重した寄り添うケアを実践しています。あたたかくてやさしい地域の医療・介護を共につくる仲間を募集しています。求人に関しましてはぜひホームページをご覧ください。よろしく願いいたします！

* 医療法人社団棕櫚の会：宮の沢3条3丁目6-1

電話：011-688-9807



PROFILE

一本 崇宏（いちき・たかひろ）

1990年、札幌医科大学医学部 卒業。
同年、札幌医科大学附属病院 小児科。
同年、北海道立小児総合保健センター（現・北海道立子ども総合医療・療育センター）小児科。
1993年、青森県立中央病院 小児科。
1995年、国立療養所八雲病院 小児科。
1996年、聖隷三方原病院 総合診療 後期研修医。
1998年、町立徳別病院（現・むかわ町国民健康保険徳別診療所）。
2002年、諏訪中央病院 総合診療部。
2003年、町立徳別病院（現・むかわ町国民健康保険徳別診療所）副院長。
2004年、同病院 院長。
2005年、むかわ町国民健康保険徳別診療所 所長。
2013年、クラーク病院 内科。
2014年、ホサナファミリークリニック 開業。

資格・所属

日本小児科学会 小児科専門医、日本在宅医療連合学会 会員、日本プライマリ・ケア連合学会 会員、日本緩和医療学会 会員、産業医。

INFORMATION

医療法人社団 棕櫚の会 ホサナファミリークリニック



URL <https://hosanna.jp/>

所在地	〒063-0053 北海道札幌市西区宮の沢3条3-6-1 TEL 011-688-9807 FAX 011-351-5260
アクセス	東西線「宮の沢」駅より車で約6分、徒歩約22分 JR北海道バス「宮の沢3条3丁目」停留所より徒歩約2分
診療科目	訪問診療、外来（予約制）
診療時間	〈月～金〉9:00～17:00 〈休診日〉土・日・祝
PURPOSE （経営理念）	全職員の物心両面の豊かさを追求するとともに、心から安心して暮らせる地域社会の発展に貢献するホサナは全職員の物心両面の豊かさを追求を大切にします。ホサナからその家族や地域に「幸せの輪」を広げていく。これを基本指針とし、明確な目的と志を持ち、地域社会にどのような貢献ができるかを考える全職員が一丸となり、良質な医療とケアを通じて、地域の方々が安心して暮らせる社会の成長発展に貢献し続けてまいります。
MISSION （使命、存在意義）	「愛」を持って届ける「安心」をここから 我々は、キリスト教の「愛」の精神に基づいた、隣人愛と謙遜をもって、地域社会や人々に寄り添い、介護や医療で悩む方、そのご家族の方の相談役であり続けます。良質な医療・介護・看護を通して、全力でその方の人生と向き合い、いのちと触れ合い、生きるお手伝いをする（伴走する）ことで地域社会に確かな安心をもたらし続けてまいります。
ホサナグループ	・ホサナ訪問看護ステーション ・住宅型有料老人ホーム ホサナケアホーム ・小規模多機能型居宅介護 まるごとケアの家 ホサナホーム ・ハレルヤ訪問介護ステーション

スタッフ募集



社会福祉法人 宏友会

私たちは西区で社会福祉事業を運営している法人です。

●特別養護老人ホーム 手稲リハビリテーションセンター



入所 131 名
短期入所 10 名

住所：札幌市西区宮の沢 490 番地

正規職員の看護職員を募集しています。(看護師、准看護師)

契約職員、パート職員も相談可能です。

勤務時間 早番 7:30～16:15 日勤 8:45～17:30 遅番 9:45～18:30

公休 年間休日 107 日 (月 9 日休み、2 月のみ 8 日休み)

オンコール 月 5 回程度あります

詳しい求人内容はこちらから御覧下さい



ご連絡ください♪



●特別養護老人ホーム 西野ケアセンター



入所 80 名
短期入所 11 名

住所：札幌市西区西野 2 条 8 丁目 1-8

正規職員の看護職員を募集しています。(看護師、准看護師)

契約職員、パート職員も相談可能です。

勤務時間 早番 7:30～16:15 日勤 9:00～17:45 遅番 9:30～18:15

公休 年間休日 107 日 (月 9 日休み、2 月のみ 8 日休み)

オンコール 月 7 回程度あります

詳しい求人内容はこちらから御覧下さい



ご連絡ください♪

ご興味ある方はぜひ下記にご連絡ください。

011-663-2931 社会福祉法人宏友会 法人本部 採用担当 三原



医療と介護の連絡協議会 会員名簿

ひろ内科循環器科クリニック 院長 首藤 寛	☎671-2727
ホサナファミリークリニック 院長 一木崇宏	☎688-9807
まるごとケアの家 ホサナホーム 理事 伊藤秀行	☎688-9859
札幌孝仁会記念病院 事務部長 白水郁也	☎665-0020
宏友会 手稲リハビリテーションセンター	
統括施設長 古谷芽生	☎663-2931
宏友会 風車の家 施設長 松本 徹	☎666-8514
創成会 グットケア宮の沢 管理者 田湯 瞳	☎668-8000
有料老人ホーム 山の手後楽園 施設長 石破隆二	☎616-6766
愛敬園 北愛館 法人本部長 山崎正人	☎669-4171
札幌市西区第2包括支援センター	
副センター長 吉田博和	☎661-3929
札幌市西区介護予防センター西町 センター長 大西由紀子	☎663-2558
宮の沢町内会 会長 中川和彦	☎090-1646-7622





『クリスマスコンサート ありがとうございました』

札幌孝仁会記念病院のみなさん、今回はクリスマスコンサートという貴重な演奏の場をいただきありがとうございます。

僕は昨年もロビーコンサートにソロとして出演させていただく機会がありましたが、今年の出演は昨年のそれとはまた違った感覚もありました。

僕は今年の6月に体育の授業で剥離骨折(成長期の特に男子には多いそうです)をしてしまい、学校から緊急搬送されました。その搬送先が札幌孝仁会記念病院でした。病院に入院してから、色々な感情をととても大きく感じました。痛みはもちろんですが、悲しさ、辛さ、そして心細さ…

今回はそれらを抱えた人たちの光に少しでもなれば！という思いを全員で込めました。

退院後もリハビリに通院し、お世話になったスタッフのみなさんがとにかくあたたかく、僕の音楽に対する姿勢に寄り添ってリハビリも進めてくれました。

同じ場所だけれど、昨年今年とこの病院からは様々な学びを得ることができたと感じています。

今回の演奏会ではソロも多く披露させていただいたり、何より大切な仲間との出演ということもあってとても楽しかったですし、またこうしてお世話になった病院で演奏させてもらえてスタッフのみなさんにも労いとあの時の「音返し」が少しでもできたかなと思います。

病室から車椅子やベッドのまま看護師さんとともに演奏会に来てくれた患者さんたちもたくさんいらっしゃいました。また、地域の方のご来場も本当に多く、ロビーがお客様で埋め尽くされた光景は奏者としてもとても嬉しかったですし、みなさんがとても楽しそうに聴いてくださって、最後まで気持ちよく演奏できました。

できればまたそう遠くない日に、みなさんと僕たちの音楽とでふれあえますように…

最高の演奏の場をいただき、本当にありがとうございました！！



Miyanooka Snow Brassリーダー
ユーフォニアム 片桐 聡真(中2)



